

ラジオドラマ用オリジナルシナリオ

One Shot Story Series

「残り香の記憶（後編）」

作・牛

《キャスト紹介》

- 男性客A . . . 探偵。
ハードボイルドになりきれないソフトボイルド。
- 男性客B . . . 年齢24才。営業マン。
素朴で、純情。
過去の女を探している。
- マスター . . . 女性バーテンダー。

《 舞 台 》

港が近くにあるBAR「サンドリオン」。
店内には常にジャズが流れている。

(PLAY-1)

S E ドアの開閉の音

マスター : いらっしやいませ。
男性客A : 失礼ですけど島田さんでしょうか？
男性客B : はい。ではあなたが・・・
男性客A : 探偵の木島です。従兄弟を通じてご依頼を頂きました。
男性客B : どうもありがとうございます。なにかお飲み物を。
男性客A : そうですね、じゃマスター水割りをください。
マスター : かしこまりました。

S E ドリンクを作る音

マスター : お待たせしました。
男性客A : ありがとう。
男性客B : それで・・・
男性客A : ええ、詳しいお話しは僕の従兄弟の春香から聞きました。
最初難しいご依頼だと思い、お断りしようと思ったんです。
なにせ探すにもお名前しかわからない。
男性客B : すみません。
男性客A : それとプール・ムッシュというコロン・・・
男性客B : (すまなそうに) そうなんです・・・
男性客A : たぶん私一人じゃお手上げだったことでしょう。
男性客B : ...
男性客A : でも、従兄弟の春香とこのマスターの協力が
あったから、でも女性の感とは凄いものだと思いました。
正直言って私は自信をなくしました。
男性客B : (歎び) それじゃ・・・マスター、
ありがとうございました。
マスター : いいえ、私はなにも・・・
男性客B : それで、彼女は今どこに・・・

男性客A : (言いにくそうに) それが、
そう喜んでもらっては言いにくくなるな・・・
男性客B : え、一体どういうことです・・・
男性客A : その前に、もう一杯いかがですか？

(PLAY-2)

男性客B : (驚き) まさか！・・・彼女が死んでたなんて・・・
男性客A : お気の毒です・・・
男性客B : なんていう事だ・・・信じられない。静が・・・
男性客A : あなたのお気持ちはお察しします。
男性客B : 彼女の亡骸は今どこに？
男性客A : それは、ご遺族のご要望でお教えすることはできません。
男性客B : どうして？
男性客A : 詳しくは私もわかりません、ただそういうことでした。
男性客B : 死因は、なんだったんです？
男性客A : 血液の、癌です。
男性客B : そうですか。
男性客A : 彼女は最期にこう言って亡くなられたそうです。
もし私が死んで、島田という男の人が私を探しに
来たとき、これをその人に渡して欲しいと・・・
男性客B : こ、これは・・・
男性客A : ええ、彼女が生前愛用していたコロンです。
男性客B : プール、ムッシュ・・・
男性客A : ご遺族の方からお預かりしてきました。
男性客B : ああ、この匂い間違いない、彼女の匂いだ・・・
確かに彼女がいる・・・
男性客A : あなたの記憶に間違いありませんでした。
たいしたもんです。
男性客B : 静・・・どうして死んだりしたんだ・・・
どうして僕の前から消えてしまったんだ・・・
マスター : きっと静さんは最期まであなたを
愛していたからだと思いますよ。
男性客B : マスター・・・

男性客A : マスターの言ったとおり、
彼女は最期まであなたを愛していた。
だからこそあなたの前から姿を消した・・・

(PLAY-3)

男性客A : これは私の推理ですけど。
静さんはあなたと会ったとき自分の病気が不治の
病であることを知った直後じゃなかったんでしょうか。

男性客B : そうか、あのときの表情は死への恐怖だったんだ。

男性客A : ええ、だから彼女は知人に会うことを避け、
恐怖を忘れようとあなたと楽しい時間を過ごしたかった。

男性客B : じゃなにも僕でなくても・・・

男性客A : 最初はそうだったかも知れませんが、
やがてあなたのことを本当に愛したんです。

男性客B : そんなに愛してくれていたのなら、
どうしていなくなったんです。

マスター : 死に行く自分の醜いかもしれない姿を、
見られなくなかったのじゃないでしょうか。
それと、これから社会に出ていくあなたの
邪魔になると考えたのかもしれない。

男性客A : 私もマスターの考えと同じです。
それが愛する人への本当の愛の姿ではないでしょうか？

男性客B : 愛の姿・・・

男性客A : 身を引く愛、自分本意では決して
出来る事ではありません。

男性客B : マスター、もう1杯だけ作ってもらえますか。

マスター : 同じものを？

男性客B : そう、X・Y・Z・・・
彼女が最初に教えてくれたカクテル。
今その意味が始めて判りましたよ。
これ以上後がない・・・
生きることの最期という意味だったんだ・・・

男性客A : そしてあなたが最後の人という意味も・・・

(PLAY-4)

- 男性客B : どうもお世話になりました。最終便で松山へ帰ります。
男性客A : そうですか。
男性客B : マスターにもお礼を言います。ありがとうございました。
マスター : お気を落とさないで、頑張ってください。
男性客B : はい。最後にマスターに作ってもらったX・Y・Zで
少しは元気になりました。
それと静からもらった本当の愛を自信にして、
彼女が生きたかった分も僕が生きます。
本当に色々ありがとうございました。
マスター : お元気で・・・
男性客B : (わざと大きな声で) さようなら。

S E ドアの開閉の音

- 男性客A : (先程の落ち着いた様子とはガラリと変わり)
もう、嫌だ！
マスター : どうされましたか？
男性客A : 僕は探偵失格です。今日を限りに探偵を辞めます。
憧れてなった職業だけど、やっぱり僕にはむきません。
マスター : どうしたんですか？
男性客A : マスター、今の男いい奴ですよ。
マスター : そうですね。
男性客A : あいつの気持ち、痛いほどわかりますよ。
元気な振りして出ていったけど、
こらえ切れない涙で歩いてるんですよ。
純情で一途なんですよ。痛いほど判るんですよ。
いなくなった彼女のイメージを思って、
何年でも探し歩く奴なんですよ。それなのに・・・
マスター : それなのに？

男性客A : そんな奴に事実を言えなかった・・・
マスター : 事実を言えなかった？
男性客A : 彼に僕は嘘をつきました。
探偵という職業は本来ありのままの事実を
クライアントに報告するのが仕事です。
マスター : 嘘、だったんですか？
男性客A : ましてや、死んだなんて・・・
マスター : では・・・
男性客A : 彼が探していた女性は生きてます。ピンピンしてますよ。

(PLAY-5)

男性客A : 春香ねえさんとマスターが霧野静という名前が
あまりにも出来すぎてるんじゃないかという推測どおり、
彼女は北野で一時「モンロー」という
店のママもやっていたそうです。
もちろん霧野静は源氏名で、本名は山口康子。
マスターが紹介してくれたナイトスポット専門の
求人誌の支社長が名前を言えばすぐ教えてくれました。
さすが蛇の道は蛇ですね。
マスター : そうですか。
男性客A : 問題となったプール・ムッシュは実は男性用コロン。
普通女性はつけない。だから見つけにくかったわけだ。
マスターも初めから知っていたんでしょ。
マスター : ええ・・・女性が男性用の香りをつけるのは、
自分の愛しているその香りの男性と常に
一緒にいたいと思う気持ちから・・・
男性客A : 浮気のカモフラージュ、夜の女の子の間での流行、
その真意は判りませんが、そのプール・ムッシュの
女はかなりの男の間をテンテンと渡り歩いてたようですよ。
ムッシュはフランス語で男性。
男性をため込む女。
そんな意味合いを誇らしげにしてた感じも匂いますね。
マスター : それで、今は？

男性客A : ちゃっかり、いい金持ちを見つけて結婚しました。
僕が訪ねて行った時も、自分の過去を色々知ってるもんだから、
てっきりゆすりだと思ったみたいです。
島田さんの話をしても彼女、全然覚えていませんでした。
とにかく帰ってくれの一点張りで。

マスター : そうですか。

男性客A : 男から捨てられて、行く宛の無かった時偶然声を
掛けられたのが島田さんだった。
そして次のいい男を見つけるまでの繋ぎの場だった、
というところが本当じゃないですか？

マスター : そうかもしれませんね。

男性客A : そして、最後にそのコロンを僕に渡して彼女は言いました。
むかしのわたしは死んだ事にしてちょうだいと・・・

(PLAY-6)

マスター : そうでしたか。嫌な目に合われたのですね。

男性客A : いえ、もう嫌な目には慣れていましたが、
今回の依頼者にはどうしても事実は報告できなかった。
実は僕にも苦い経験がありますから。
昔の好きだった女性に会いに行ったら
とんでもなく変わっていてガッカリしたという。

マスター : 誰にでも、1度はあるんじゃないでしょうか。

男性客A : 人間良かった記憶って、その事実より時間の経過の中で
美化しちゃうんですよね。

マスター : そうですね。

男性客A : もし島田さんに彼女の事実を教えれば、
傷つくことは目に見えている。
それよりも霧野静という彼が作りあげた女性の思い出を
大切にしていあげたかったんです。

マスター : 醜い事実を知るより、美しい偽りを信じる方が
幸せなこともあるんですね。

男性客A : そのとおりです。
今の時代は情報、情報と言ってなにがなんでも

あつた事実だけが重要で、そこから起きる人間の感情だとか、悲劇まで考えなくなってしまつてる。

マスター : 思いやる気持ちが希薄になつてるのかもしれないね。

男性客A : 相手の知らないでいいところまで知つて、不幸になつていく人が多すぎます。
知らなければ、幸せなものを・・・

マスター : 悲しいですね。

男性客A : 事実を報告するのがプロの探偵なのに、僕は出来なかつた。
だから僕は探偵を廃業するんです。
やっぱり僕は今の時代じゃダメなのかなあ。

マスター : 探偵としてはダメでも、人間としては相手を思いやる大切な心をお持ちの方・・・

男性客A : 無理に褒めないでくださいよ、マスター。

マスター : いいえ、私がもし探偵さんの必要が出来たなら、お客様のような探偵さんにぜひお願いしたいですね。

男性客A : 本当ですか？

マスター : はい。

男性客A : よし、今夜は後戻りできない自分の岐路をじっくり考えてみます。
だから僕にもアレを作ってください。

マスター : はい。X・Y・Zを・・・

おわり